

[課題演習概要]

「認知特性」に着目した主体的な学習の試み —英語科教育における単語学習において—

桃 坂 七 海
Nanami MOMOSAKA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
中等教科教育高度実践力プログラム

(2024 年 1 月 10 日受理)

キーワード：認知特性、英単語学習方法、授業実践、学びに向かう力

1 研究の目的

本研究の目的は、中学生が自己の学習についての理解を深め、「学びに向かう力」（文部科学省）を高めるための方途を見出すことである。これは生徒が【自己の学習について無自覚でなく自覚的であること】、【自己の「認知特性」を捉えること】、【自己に適した学習方法に意識を向け学ぶこと】を含む。これらが、学習意欲や「学びに向かう力」の具体であり、主体的な学習と考える。このように自己を認識・自覚し、自己調整しながら学ぶことは、ユネスコの学習権宣言(1985)に記された「人々を、なりゆきまかせの客体から、自らの歴史をつくる主体」への実現にもつながる。

こうした研究は、生徒側と教師側のそれぞれから意義がある。

まず、生徒にとっては、「認知特性」を手がかりとした自己に適した学習方法があるという思考や、学習などの物事には手がかりがあるという思考の獲得が期待される。加えて、自己の「認知特性」を自覚することで、何か行動を起こすときや、思考・選択するときに自分のやりやすい方法が見つけやすくなる。これは、将来的にも自己の特性を活かして選択や行動することにつながる。

次に、教師にとっては、個々の生徒の「認知特性」を意識した生徒理解や、教師自身の「認知特性」を捉えることによる自己成長になる。授業スタイルが教師の「認知特性」によって固定化されないために、授業内容を振り返り、検討し、吟味することが教師の自己成長になる。

なお、本研究の詳細は以下の研究論文に記載し

ている。

研究論文：桃坂七海「『認知特性』に着目した主体的な学習の試み」（2024 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報 14 号）

2 研究の計画

本研究では、まず認知・「認知特性」についての文献研究と理論の整理を行う。なぜなら、【自己の「認知特性」を捉えること】が必要となるためである。次に、「認知特性」を活用した学習体験を生徒が実践する。なぜなら、【自己に適した学習方法に意識を向け学ぶこと】が必要となるためである。最後に、実践による成果と課題の整理をする。

3 研究の内容

(1) 認知と「認知特性」について

まず、認知(cognition)について示す。認知とは知覚、思考、記憶などを含む「ものを知ることに関わる全ての機能」（『認知心理学を知る第2版』）である。自己の認知やその特徴を意識した上で学習しなければ、学習意欲や学習結果にも影響を与える。そのため、生徒は、まず自己の認知を自覚する必要がある。

次に、各自が持っている認知の特性について述べる。本田真美(2016)は、それらを「認知特性」と捉えた。これについて「外界からの情報を頭の中で理解したり、記憶したり、表現したりする方法のことで、思考の嗜好」と示している。つまり、「認知特性」とはその人のやりやすさのことである。また、「認知特性」は6タイプが存在する。そ

これは、視覚優位の(a)写真カメラアイタイプ、(b)三次元映像タイプ、言語優位の(c)言語映像タイプ、(d)言語抽象タイプ、聴覚優位の(e)聴覚言語タイプ、(f)聴覚&音タイプである。「認知特性」は重複している部分もあり、最も重要なことは「これしかない」と線引きし、思い込めないことである。6タイプがバランスよく備わっている人もいれば、状況に応じて「認知特性」や学習方法を使い分けている人もいる。そのため、生徒に示す場合は「自分はこのタイプでこの方法しかない」や「教師が示すこの方法しかない」などと限定されないような声かけが必要である。

(2)「認知特性」を意識した英単語の学習方法

対象生徒 29 名全員にそれぞれ 1 つ以上の強い「認知特性」があり、29 名中 16 名は 2 つの強い「認知特性」があった。こうした生徒に対して、どのような学習方法が必要か考えた。本研究での実践授業では英単語に着目して、6 タイプに基づき、それぞれに有効と思われる学習方法 6 つを考案した。それらは【方法 A~F】として提示した。例として、(b)三次元映像タイプに有効と思われる方法の【方法 B】を挙げる。このタイプは、空間と時間軸を使って三次元で思考するという特徴がある。そのため、英単語を覚えたときの周辺イメージを手がかりに、思い出したい情報を引き出す【方法 B】想起トレーニング方法を提案した。周辺イメージとは、その英単語を目にしたときの情景、場所、周辺の文字、周辺の人、五感に関わるものなどである。実践授業を行った教室では、周辺イメージを設定することが難しいため、単語ごとに周辺イメージの「人(一緒に覚えるメンバー)」を変更して英単語を覚えるようにした。そして、記憶したものを想起するときに、周辺イメージ設定の大切さを実感させることを期待した。

(3)英単語学習(【方法 B】の場合)の成果と課題

本項では、英単語学習(【方法 B】の場合)について、【方法 B】を実践した生徒の振り返り記述から成果(3点)、課題(1点)を述べる。

まず、成果である。1 点目、自己に適していると考える生徒がいたことである。生徒の記述「すぐに覚えることができ印象に残るので忘れないと思った」、「身のまわりや色や雰囲気などを関連づけて話すだけで記憶に残った」からも捉えられる。2 点目、自己への気づきがあったことである。生徒の記述「思い返してみると、場面で覚えることが多い」からも捉えられる。3 点目、【方法 B】の活用である。生徒の記述「歴史の流れや歴史の人物を覚えるときに役に立ちそう」からも捉えら

れる。これらから、「認知特性」を自覚し、それに有効と思われる方法を学習体験することで、これまでの学習、生活、思考などを振り返り、【方法 B】の活用や発展につなげることができる。

次に、課題である。それは、周辺イメージの設定が難しいことである。生徒の記述「環境(周辺イメージ)を変えてやるのが難しいと思った」、「印象に残る情報(周辺イメージ)を見つける必要があるから時間がかかる」、「ひとりだと難しい」からも捉えられる。このことから、【方法 B】には周辺イメージの設定に関して「やりにくさ」がある。実践は教室で行い、周辺イメージの設定が難しかったため、家庭学習など学校外学習への周辺イメージの設定に関して生徒に助言する必要がある。

4 成果(○)と課題(●)

本研究における成果と課題は次のとおりである。教師に関わるものを(教)とし、生徒に関わるものを(生)とする。

- 生徒の「認知特性」の理解とともに、教師の授業改善につながることの自覚と認識。(教)
- 6 タイプ「認知特性」に有効と思われる方法の検討・吟味。(教)
- 「認知特性」を踏まえた学習方法の実践が大切であることの認識。(生)
- 6 つの学習方法の「やりにくさ」の改善。学習方法の提示の仕方や、プリント構成などの改善案を検討・吟味。(教)
- より多くの学習方法の試行・選択。(生)
- 複数教材の準備、生徒の試行の機会設定。(教)
- 1 時間の授業ではなく、単元や年単位で研究計画を立て、進めていくこと。(教)
- 英単語だけでなく、英文法や文章読解、4 技能 5 領域での活動などの自己に適した学習方法を研究すること。(教)

主な引用・参考文献

- 文部科学省、『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)』、平成 29 年 3 月
 ユネスコ「学習権宣言」、1985 年 3 月 29 日、第 4 回
 ユネスコ国際成人教育会議(パリ)
 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会、『教育課程部会における審議のまとめ』、令和 3 年 1 月 25 日、p. 12
 市川伸一、伊東裕司、鈴木則子、『認知心理学を知る 第 2 版』、1989 年 4 月 25 日、ブレーン出版、p. 1
 本田真美、『医師のつくった「頭のテスト」』、2016 年 3 月 20 日、光文社、pp. 13-24、pp. 64-65